

公共への問いとメッセージ

——映画「パブリック 図書館の奇跡」をめぐって——

(アメリカ公開2018年、日本公開2020年)

権 安理

(コミュニティ政策学科教員)

I. はじめに

1980年代のハリウッド青春映画である「ブレイクファスト・クラブ」と「セント・エルモス・ファイアー」はよく知られているだろう。“The Public”（公共）というタイトル（日本語タイトルは「パブリック 図書館の奇跡」）がつけられたこの映画は、その双方に主演したエミリオ・エステベスが制作・監督・脚本・主演した作品である。ただし本作品は青春映画ではない。社会派とも評されているが、ここには二つのメッセージがあるように思われる。

一つは明示的に語られており、視聴者に賛同を求める主張的なものである。もう一つはいわば挑戦的・問題提起的なもので、賛否よりも思考を促すものであると同時に、あくまで解釈によって浮かび上がる暗示的なメッセージである。本作品が持つこの二つのメッセージはいかなるものか、という観点から映画評をしていこう。

II. 映画の概略

シンシナティにある公共図書館には、毎日ホームレスの人々がやって来る。トイレを使ったり寒さをしのいだりPCを使ったり……、さらには本を読んだりするためである。彼・彼女らは開館前から並んで待っている。そして閉館になると（追い出されるので）去って行き、路上で夜を明かす。

ある年、シンシナティは大寒波に見舞われた。路上で夜を過ごすことは死を意味する。市が用意した避難シェルターは満員。そこで、ホームレス70人が図書館閉館後も居続けると宣言する。いわば立てこもりである。それに協力するのが、エステベス演じる主人公で図書館員のスチュアートである。もちろん“体制側”は反対し、マスコミは「スチュアートによる人質事件」という話題になりそうなフェイクニュースを流す。結局、最後には警官隊が突入するのだが、そのときスチュアートたちは驚くべき行動をとる……。

このような展開を通して、ホームレスの存在という社会問題や、公共はどうかといった問いを投げかける映画となっている。公共哲学の第一人者であるマイケル・サンデルなら、その授業で「どちらに賛成？ どう行動する？」と学生に質問するかもしれない。本作品は紛れもなく社会的で教訓的な要素を持っている。ただし他方で、どの登場人物にも憎めない側面があるコメディ的要素もあり、扱っているテーマの重さとは裏腹に視聴者にとって親しみやすい映画にもなっている。ちなみに、映画の公式ホームページでは「……あなたに《希望》を届ける笑いと涙の感動作」と謳われている（ロングライド 2020）。

Ⅲ. 明示的メッセージ

ホームレスが居座りを宣言したときには困惑するが、結局は一緒に立てこもり、途中からむしろ先導する図書館員のスチュアート。彼は元ホームレスであった。対峙するのは検察官。市長選を控えて市民に早期解決をアピールしたい。理解派の館長、強行突入を決断する警察、ホームレスを応援する館員や市民……。登場人物はそれぞれの立場から賛否を示している。

そしてこの賛否は、公共に対する両極的な観点・意見を分かりやすく提示したものとなっている。賛同する側は、公共が持つべき開放性・解放性という観点から、寛容の態度を示していると言える。公共は誰も排除してはならない。他方で非難する側は、公共が持つべき秩序という観点から反対する。そこにはルールが必要であり、過度に逸脱することは許されない。ここでポイントとなるのは、公共それ自体に対する賛否ではなく、公共の重要性を認めたいという力点の置き方に応じた主張の差異なのである。

本作品では、まさに「民主主義を巡る2つの考えがぶつかりあっている」（杉本2020）。オンラインメディアの「ハフポスト」に掲載された、監督・主演のエステベスへのインタビュー記事にはこう書かれている。公共をめぐる二つの見解はまた、民主主義に対するそれでもある。本作品は、ホームレスによる図書館での立てこもりを題材にして、この二極を登場人物の態度という形で明解に提示しているのだ。

ただし断っておくと、本作品は“中立的”な立場を採ってはいない。公共図書館に頼らざるを得ない“存在者がいる現実”を明らかにしつつ、二極のうちの前掲者——賛成・擁護・寛容——の立場を採るべきという明示的なメッセージを発している。この点に関連するが、エステベスはインタビューで次のように言っている。

デイヴィス（検察官）は法や秩序を守ることが民主主義と考え、アンダーソン館長は人や情報への自由を守ることが民主主義だと考えています。それぞれに思い描く民主主義の形があるわけですね。しかし、デイヴィスは、民主主義という概念を武器化してしまっていると思います。（杉本 2020）〔括弧内引用者〕

「民主主義という概念」の「武器化」という言葉が使用されているのは興味深い。武器は言うまでもなく、他者を攻撃するという明確な目的を持った道具である。そして、当の民主主義それ自体が他者を攻撃する武器にもなり得る（なってしまう）ことが示唆されているのだ。エステベスはもちろんそれに反対している。この点をふまえて、民主主義を再び本作品のタイトルである公共という言葉に置き換えて、公共について原理的に考えてみよう。

IV. The Public（公共）の再考

ハンナ・アーレントは、公共が成り立つためにはprivateが必要であると言っている（Arendt (1958) 1998）。辞書的な意味でも、public（公共的）の対義語はprivate（私的）なので、その主張はこの点だけみれば常識に沿うものであろう。「私」があってこそその「公共」というわけだ。「私」には私的な関係（家族・友人関係）があり、帰るべき我が家としての「私宅=家」がある。その前提のうえでアーレントは、私的領域とは完全に峻別される公共空間が存在すべきと主張した。公共は私的領域の延長性上にあってはならない、「私」が集散する場が公共ではない、と。

だが、実際の公共はどうだろうか。私的領域の延長線上にあるとみなされているのではなかろうか。図式的に言えば、「私」が集散した「私・私・私…」の場が公共なのである。公共は「私」が集まった領域であり、あくまで基本的な単位は「私」である。そうであるからこそ、公共でも各々の「私」（自分）は各々の「私」（他人）へと“配慮”することが求められる。私宅=家でないのだからエゴを押し通さずに行儀よくせよ、というわけだ。

先に示した二項図式を思い起こそう。ホームレスに対する見解や態度の相違である。一方は、開放性・解放性という観点から寛容を良しとしていた。他方は、ルールや秩序という観点から排除を求めている。つまり前者は、立てこもらざるを得ない「私」の事情に鑑みて、それに配慮をすべきと考える。後者は、ホームレスの行動が他の「私」に過分に迷惑をかけていると考えて、他の「私」に対する配慮を重視する。そして、各々の配慮が行動として実行に移されるとき、前者では例えば映画にあったように「ピザの差し入れ」やスチュアートの行動となり、

後者では暴力的な排除、すなわち「武器化」という形をとることになる。

ここで次のような問いが生じ得る。「現況の公共を前提としたうえでの上記二つのいずれかの立場をとるべきかという問い」以外の“問い”はあり得ないのか。「武器化」に対して、その前提から問い直すことはできないのか。

V. 暗示的メッセージ

本作品に対する、あるレビューには次のように書かれている。この映画は「全てのことについて赤マーカーを引いて、あまりにはっきりと説明しているので、あなた方が自分で何かを発見するようにはなっていない」(Rainer 2020) [強調は引用者]。本作品が、いわばサンデル的に分かりやすい形で提示された二項対立図式的な問いかけをしているのは確かであろう。だが他方で、本作品はその明瞭さが生まれる基盤自体に対する問題提起もしているように思われる。それがこの小論の冒頭で述べた暗示的メッセージである。

この点は映画のラストに関わる。“ネタバレ”的になってしまうが、この小論の冒頭で、警官隊が突入したときに、スチュアートとホームレスが驚くべき行動をとったことを述べた。それは何だったのか。抵抗か投降か、どちらなのかという関心で観ていたのだが、何と全員が“裸”になっていた。それを目の当たりにした警官隊はたじろぐ。激しい抵抗を覚悟していたのかもしれない。だが抵抗でも投降でも条件闘争でもなく、裸である。結局、全員連れ出されて護送車に乗せられるのだが、待ち構えていたマスコミは撮影・中継することができなかった。実は作品の冒頭でも、図書館で裸になっている“困った”入館者の描写がある。したがって、ラストの裸には重要な意味や意図があると考えの方が自然であろう。

なぜ裸なのか。それをどう解釈できるのか。結論から言えば、それは「私」を前提とした思考枠組み、あるいは「私」を前提とした「公私区分」それ自体への問題提起であると考えることができる。

ホームレスには、文字通りの意味で「私宅=家」がない。公共図書館が閉まると家ではなく、路上へと戻る。帰るべき私的領域はなく、したがって、公私区分を前提とした「私的⇔公共的」の横断・往復ができない。言い換えれば、彼・彼女らは公共のみを生きているのだ。そして最後／最初の裸である。公共の場で何よりも迷惑と考えられる裸だが、家であれば話は別である。つまり、裸はそれ自体が問題なのではない。公共の場であればこそなのだが、ホームレスにはそもそも公共の場しかない。このような意味で、彼・彼女らは、「私・私的領域」という「ホーム」があることを前提とした公私区分の外部の存在者なのである。公私

区分の内部における異者ではない。

最後のシーンの「公共の場での裸という反抗」は、そのことを示す“装置”となっているのではなからうか。示す対象（相手）は、公私区分の内部に居て、彼・彼女らに「寛容or非寛容」の見解・態度をとる（エステベスを含めた）「あなた方=私たち」である。このような意味で本作品は、見解の相違にも関わらず「“私たち”が暗に前提としている枠組み」に対する再考を促す挑戦的な映画にもなっている。“私たちの公共”ということそれ自体に対する問いかけである。

【資料・出典】

Arendt, Hannah, (1958) 1998, *The Human Condition*, The University of Chicago Press.

Rainer, Peter, 2020, *Critic Reviews for The Public*, Rotten Tomatoes. (https://www.rottentomatoes.com/m/the_public; 2021/8/15閲覧).

杉本穂高, 2020, 「図書館が“民主主義”と“生命”を守る最後の砦に。『パブリック 図書館の奇跡』が問う公共のあり方とは」, ハフポスト日本版「アートとカルチャー」2020年7月25日 (https://www.huffingtonpost.jp/entry/story_jp_5f1507e8c5b6ceec246c4758b; 2021/8/15閲覧).

ロングライド, 2020, 映画『パブリック 図書館の奇跡』公式サイト (<https://longride.jp/public/>; 2021/8/15閲覧).

DVD: 「パブリック 図書館の奇跡」(2021, バップ).